

特別企画

関西 座談会

二〇〇八

二〇〇八年六月、「九州大学関西同窓会」が発足しました。二〇〇四年に設立された東京同窓会と並ぶ全学的同窓会として、今後の活動が大いに期待されます。

今回は、関西同窓会の設立発起人としてご尽力いただいたお三方に、東京からのゲストを加えて、母校と後輩への熱い想いを語っていただきました。

九州大学の 新たな 百年に向けて

関西同窓会からのメッセージ



座談会の出席者。前列左から、中野氏、荒巻氏、上野氏、藤井氏。後列左から、梶山総長、進行役の柴田副学長。

中野 健二郎

なかの・けんじろう

株式会社三井住友銀行
代表取締役副会長
関西経済同友会 代表幹事

1971年九州大学経済学部卒業、同年4月株式会社住友銀行（現三井住友銀行）へ入行。本店営業第一部長、取締役・証券部長、執行役員・投資銀行統括部長、常務、専務、副頭取等を経て2008年4月代表取締役副会長に就任。同年5月から関西経済同友会代表幹事。

荒巻 禎一

あらまき・ていいち

京都府京都文化博物館 館長
京都府公立大学法人 理事長
弁護士

1953年九州大学法学部卒業、同年4月自治省に入省。長崎県、京都府、静岡県での要職等を経て、自治大臣官房調査官、京都府総務部長、国土庁長官官房参事官、国土庁地方振興局総務課長、消防庁総務課長、京都府副知事。86年4月の初当選から2002年4月までの4期に亘り京都府知事を務める。02年11月、勲一等瑞宝章受章。

上野 至大

うえの・みちとも

西日本電信電話株式会社
相談役

1967年九州大学工学部卒業後、同年日本電信電話公社に入社、96年日本電信電話株式会社取締役相互接続推進部長、99年西日本電信電話株式会社代表取締役副社長、法人営業本部長を経て、2002年6月代表取締役社長就任。06年6月から同相談役（現職）。

藤井 龍子

ふじい・りゅうこ

大阪大学 招聘教授

1969年九州大学法学部卒業。70年4月労働省へ入省。婦人少年局婦人福祉課長、大阪府生活文化部長、労働大臣官房審議官等を経て、98年6月労働省女性局長。2001年4月内閣府情報公開審査会委員。04年4月から九州大学経営協議会委員。

梶山 千里

かじやま・ちさと

九州大学総長

1964年工学部卒業。専門は高分子化学。

進行

柴田 洋三郎

しばた・ようさぶろう

九州大学理事・副学長

1971年医学部卒業。専門は解剖学、細胞生物学。

同窓会は大学の アクティビティに直結する

柴田 このたび「第一回関西同窓会」を企画し、ご出席をお願いいたしましたところ、皆様にはご多忙な中万障繰り合わせてご出席いただき、誠にありがとうございます。このような座談会は東京ではこれまで三回開催しておりますが、今回は、待望久しかった関西同窓会の設立に合わせて、関西で活躍の皆様に、母校九州大学への提言や、後輩たちへのメッセージなどを頂戴したいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

梶山 東京同窓会に続く全学組織の関西同窓会の設立にご尽力いただき、本当にありがとうございます。特に荒巻さんには、会長の要職を引き受けていただき、心から感謝しております。同窓会の力は、大学のアクティビティそのものに直結すると私は考えています。欧米、特にアメリカでは、同窓会の強い大学は非常にアクティビティが高いと言われます。

二〇一一年に控えております百周年記念事業を成功させることも

視野に入れて、今回の関西同窓会の設立を機に、関西でも同窓の皆さんの気運が高まりますことを期待しております。また本日は、大阪駅前第一ビルに大阪オフィスを開設いたしました。これは、関西の企業、同窓の方々と九州大学間の情報発信、取得に活用したいと考えております。また、関西の大学と九州大学との連携の場としても役立てます。大学間の協力関係づくりも今後の重要なテーマです。九州大学の関西におけるこのような活力の中心になっていただけるのが、関西同窓会ではないかと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

教養部、田島寮、 フロントム・・・ 思いつきは尽きない

柴田 では早速ですが、自己紹介を兼ねて、九大生時代の思い出などをお話しただけですでしょうか。

荒巻 私はずば抜けて年上でございます。昭和二十八年に、新制九州大学の第一回生として卒業させ

ていただきました。法学部でございました。その後、いわゆる官僚の仕事に就き、最後の段階では知事として四期、京都府でお世話になりました。九大時代の思い出はとにかくたくさんあり、年を取るほどに懐かしいものになります。その中で一つ、二つ申し上げますと、まず、テニス部の思い出です。新制大学に移行したてで、入学当時は大学の予算も運用も固まらない段階。私たちはテニスコートを持ちませんでした。私はキャプテンだったので、テニスコートが欲しいということで五万円の予算を大学からもらい、六本松キャンパスの芋畑だったところをテニスコートに仕上げました。当時でも普通だったら何十万もかかるところです。それが五万円でできたのは刑務所の囚人さんの郊外作業制度を活用したからなのです。でこぼこでイレギュラーバウンドばかりするコートでしたが（笑）。

それからもう一つ、強烈だったのが、今日はたまたま六月二十五日ですが、昭和二十五年のこの日に朝鮮戦争が始まったことです。私は二年生だったと思います。家で友達と碁を打っている時に、ラジオでそのニュースが飛び込んできた記憶が今も鮮明です。その影響が結局、授業に及びました。板付の飛行場から米軍機が朝鮮半島に向かってひっきりなしに飛ぶ。三十八度線まですぐですからね。それが九大キャンパスの真上を行くものですから、授業が全く聞けないのです。とうとう皆が騒ぎ始め、当時の総長に騒音のないよう米軍に交渉に行ってもらいましたら、「大学を移転してしまえ」の一言でにべもなかったそうで、総長には気の毒なことをしました。そういうこともあり、昭和四十三年六月に、建設中の大型計算機センターに米軍のフロントムが墜落した時は、いろいろと胸に去来するものがありました。「戦後は終わった」とされたのが昭和三十一年くらいの経済白書でしょう。私の時代は学食の飯もあまりまとものものがなくて、白米にソースをかけて食べていたことなども強烈な思い出です。

上野 私の卒業はそのフロントム

が落ちる少し前でした。入学は三十八年で、電気系の学科に入りました。私は化学が好きだったので、高校時代は九大の応用化学科を目標にしていたのですが、いざ願書を出す段階になって、応用化学科は自分の実力ではハードルが高いと判断し、まずは九大入学ということで、志望を電気系学科に変えました。好きな化学ではなく、ちょっと苦手意識のあった電気系に入ったことは、自分のコンプレックスになりました。その上、周りとはそうそうたる進学校出身の同級生ばかり。私は鹿児島県のさらに一番南の県立高校で比較的のんびりと過ごしてきたものですから、「自分はついていけないのか」とかなりのプレッシャーを感じていました。

幸いなことにこれがバネになり、創設されて間もない「電子工学科」に入りたという思いと、大学院への進学を目指す勉強好きな同級生に刺激されて、六本松の教養部時代は自分の専門に役立ちそうな学科の講義だけは力を入れて勉強しました。現在、九州大学では全

学教育に注力されていることを聞くにつけ、もう少し専門外のこと、リベラルアーツに関心を持っていたら、別な人生を送っていたのではないかと思っています(笑)。幸か不幸か送りゼロで、奨学金とアルバイトで学費、生活費をやりくりせざるを得ないため、当月五百円の田島寮に入りました。

そこで、副寮長を務めさせていたのですが、ここでの「一人のお世話をする」という経験が、自分にとって大きな財産となったことを後々噛みしめることになりました。寮の自治をきっかけ、政治・社会問題にも関心を持ち、寮生の面倒を見ることが、ある時はお詫びで、またある時はお願いと感謝の気持ちを込めて、近隣の方々に頭を下げることで、大学との交渉、寮祭など各種イベントの企画運営などを通じて、タテヨコの人間関係をバランスよく体験し、社会人になってからどんな人とも胸襟を開いて話をする度胸をつける一助になったように思います。恋愛の相談にものっていました(笑)。一方、学業面では四年生の卒業研究

で超伝導をテーマにしました。後に超伝導マグネットセンターを作られた、故入江富士男先生の研究室で、実験では苦心惨憺した記憶があります。幾晩も徹夜で頑張ったけれども、超伝導現象を現認するのは大変難しく、悔しい思いをしました。超伝導体の電磁現象を記述した、「入江・山藤モデル」

(注)の発表が昭和四十二年のことで、私が卒論に取りかかったのはその前年です。超伝導における電磁現象の理論的解析について、教授、助教授、助手、院生の皆さんが、それぞれ広く深い知識をベ

ースにして、侃々諤諤の議論を重ねる。私自身は、ほとんど議論を聞いていただけでしたが、これが学問研究の現実なんだと、純粹に真理を探究する空気に打たれ、且つ、自分の知識不足を認識させられたことを覚えています。

就職は日本電信電話公社です。同社は通信の自由化と同時に、民営化され、経営形態はすべて急激に変わり、また、技術革新の洗礼も一番に受け、というよりもむしろ積極的に先取りし、対応しまし

た。事態は目まぐるしく変化し、私の四十年は、あつという間に過ぎたような感じですが。激流奔流の

平成二十年七月五日(土)には、九州大学田島寮祭最大のイベント「樽神興(たるみこし)」が行われました。六本松の伊都への移転で最後となった今回は、多くのOBも駆けつけましたが、その中に上野至大さんの姿もありました。「四十四年前の寮生」としてテレビ(KBC)のインタビューを受けた上野さんは、「安心しました。これだけの元気があれば、九大生は世の中をリードして行けますよ。」と答えていました。



樽神興の応援に来た上野氏(右)。左は九州大学学生寮同窓会会長の高橋義人氏。



環境変化にどう対応し、適応し、世のため、お客様のためにどんなことをすべきか、この一事を常に前向きに追求しながら、世界的変革の一端を担い変化をチャンスと一所懸命に尽力してきたなという思いです。その素地は九州大学で学び、皆さんに励ましをいただいたことで培われたものだろうと思っています。在学中は、人格識見に優れ、後に工学部長になられる五名の先生を含めて、世界的に評価される研究実績を残された先生方に講義していただき、親しく接しさせていただいたことも大切な糧になっています。今、九州大学では「大学院の重点化」が行われていますが、私のように学部で卒業する者もいますので、学部学生にも一方通行の講義だけでなく著名な先生に直接接することができる機会をつくり、教育者、研究者のベースにある暗黙知を含めた人間力を感じることができれば、学生の心構えも変わってくるのでは、という気がしています。

中野 荒巻さん、私もテニス部です。私は昭和四十二年入学で、大

学紛争でほとんど授業がなく、九州大学の思い出と言えば、テニスをやったことくらいです。あまり強い選手ではありませんでしたが、九州のランキングで、私立大学以外ではトップの九位に入ったのが唯一語れる成績でしょうか。その代わりイベントはたくさんありました。エンタープライズが佐世保に入港し、皆で大同団結して現地に行ったこと。ファントムが落ちたこと。そんなことから、授業らしい授業はゼロ。私は経済学部ですが、実のところ、経済と違うところを志望していましたし、それ以前に授業がない。先生とわいわいやる自主ゼミがあったくらいです。卒業証明書はもらいましたが、授業を受けた記憶がないのにどうやって成績が決まったのか未だもって分かりません（笑）。銀行も希望して就職したわけではないのですが、学生時代の反動か、社会に出てから俄然いろいろな興味、好奇心が湧いてきたのです。会社で多岐にわたる分野を担当さ

せてもらったことも幸いました。私は団塊と言われる世代です。友人達には弁護士や公認会計士など目標を設定して達成した人もいますが、大学でさえ勉学の機会がないのですから、かなりの人は中途半端な時代を送ったような気がします。でも、勉強の機会がないがゆえに、卒業してより強い好奇心がわいたということがありますね。

柴田 私も昭和四十六年、医学部の卒業で、全く同じ世代です。中野さんのおっしゃるとおり、卒業してから一生懸命勉強した感じがです。藤井さんも入学は私といっしょですね。

藤井 そうですね。まさに大学紛争の真っ最中で、ファントムが墜落した時は法学部の四年生だったと思います。事故は夜中だったの

（注）入江・山藤モデル

超伝導現象を工学の分野で利用する研究の黎明期に発表された、この領域の原点になると言われている考え方。損失が無いはずの超伝導体において、交流電流を流したり、変動磁界を加えたりするときになぜ損失が発生するかを明快に解き明かしている。（「山藤」は元工学部長の山藤馨名誉教授）

（文責：船木和夫 システム情報科学研究院教授）

で、翌朝、大学に駆けつけました。ノンポリでしたが、即「敵地」板付基地にデモに行きました。これが一番の思い出でしょうか。授業がないため、法学部の学生は司法試験の勉強をしている人が多かったですね。当時は男女雇用機会均等法もなく、四年制大卒の女性が就職するのは難しいどころか、不可能、あり得ない、という時代でしたので、私も三年生になってから司法試験の受験勉強に取りかかりました。ところが、自分なりに一生懸命したにも関わらず、努力不足か能力不足か不合格となり、もう一方で受けていた公務員試験に拾っていただき、労働省に入省しました。自治省で地方自治の仕事をする機会もあり、そのご縁だと思のですが、一九九三（平成五）年から九五（平成七）年まで大阪府の生活文化部長を務めました。夢路いとし、喜味こいしさん、桂米朝さんもお元気な時分で、大阪府ではこの方々と浪花の文化を振興するという大変楽しい仕事をさせていただいております。ところが、平成七年一月十七日から



仕事および生活が激変することになります。阪神・淡路大震災です。災害対策担当部長でしたので、大変な仕事をする事になったわけです。その後、労働省へ戻り、退職後にまたご縁あって、大阪大学の招聘教授の任をいただきました。大阪とはいろいろな形でご縁が深いものですから、このたび関西同窓会をお立ち上げになられるという事で、ぜひにと同窓会に加えていただいたわけでございます。よろしくお願いいたします。

伊都への移転と、 国際感覚に富む リーダーの育成

柴田 本当に待望久しかった「九州大学関西同窓会」の誕生です。本日は大阪オフィスの開所式も行われ、同窓会とオフィスという関

西における活動の基盤ができました。これから皆様にご提言など頂戴する前に、梶山総長から九州大学の現状を説明していただきます。**梶山** まず伊都キャンパス移転の進捗が重要です。平成十七年から十九年までで工学系が全て伊都へ移転し、現在約五千人強の学生、教職員が活動しています。二十一年四月からは六本松キャンパスが移転します。六本松キャンパス移転は五年くらいかけて実施する計画でしたが、法人化の機動力もうまく使って、二、三年早く実現できることになりました。六本松キャンパスが移転すると、九州大学の重心は伊都キャンパスに移ります。

教育について、私も執行部は、九州大学の学生に何が一番欠けているかを議論してきました。そうして出た結論が、国際感覚に富むリーダーシップ、積極性です。例えば、二十一世紀プログラムがあります。入学時点では所属の学部学科は決まっておらず、分野を越えて学びながら自分で専門を決めていき、それを大学のチューター

制度でフォローしていくという非常に手厚いコースです。学生には修士までは行つて、できるならば、国際公務員のような仕事に就いてほしいという思いがあります。四年間のうち半年から一年間外国に行くことも同プログラムの特徴です。

また、大学院に共通教育がないのは非常に問題で、大学院生だからこそ倫理やマネジメントをきちんと学んでおくべきだと考え、大学院の共通教育を始めました。例えばリーダーシップ論を古川貞二郎先生にお願いしています。また、カリフォルニアオフィスから、シリコンバレーを中心にベンチャーを起こした日本人やスタンフォード大の先生方の協力で、遠隔授業を行っております。

伊都キャンパスは、最先端研究の実証の場としても活用します。例えば、水素エネルギー利用社会の到来を踏まえ、「水素キャンパス」と銘打って、新エネルギー・産業技術総合開発機構と文部科学省の支援を受け、九州大学と産業技術総合研究所が共同で研究を推

進んでいます。それに加えて、エネルギーを包括的に研究しようというプロジェクトも行われています。今から五年、十年はおそらく石炭が注目されます。筑紫キャンパスを中心に炭素資源のクリーンな活用開発が行われます。九州大学には筑豊という炭鉱の歴史がバックボーンにあり、ノウハウの蓄積もあります。経済産業省の支援を受けて人材育成も行います。十年後は水素エネルギー。その先は核融合です。国際熱核融合実験炉（ITER）計画への貢献のため、九州大学、大阪大学、核融合科学研究所（NIFS）、フランス国立科学研究センター（CNRS）、プロヴァンス大学の五機関が、共同で「磁場核融合研究に関する国際連携研究所（LIA）」を発足させました。日本側のオフィスは九州大学にあります。

東アジアの発展に伴う環境への影響を最も大きく受けている地域にある九州大学にとって、東アジアの環境問題は率先して取り組むべきテーマです。既に学内の専門家を課題毎に組織し、中国や韓国

など東アジアの主要大学と連携してプロジェクトを立ち上げています。最後にもうひとつ紹介したいのが、「オートモーティブサイエンス」という新しい大学院専攻の立ち上げです。これは機械系など既存の組織とは一線を画し、心理、デザイン、将来予測などを含む文理の壁を越えた総合的な教育、研究の場です。九州大学だけではなく、福岡女子大学や、西南学院大学の研究教育陣にも手伝っていたべく計画です。また、ユーザーの視点や感性を出発点に、真に社会に喜ばれるものづくりにつなげていける人材の育成を目的とする「感性大学院」も設置する予定です。

関西と九州大学から アジア、世界を見る

柴田 九州大学は教育も研究も非常に活発化していると自負しています。では、九州大学は関西で何ができるのか。このようなことも含め、お考えをお聞かせいただきたいと思っています。

荒巻 梶山総長のお話を伺い、大

変素晴らしいことをやっていただいているなど、意を強くいたしました。中でも国際感覚を伴うリーダーシップについて、九州大学はアジアに一番近いのですから、アジアに対する貢献をしてほしいと感じております。関西からの希望といえば、関西の勢力が強い時には九州や四国の優秀な人材は当地に流入し、定着してくれる傾向があります。ところが、最近、大阪の元気がないという問題もあって、勢力がどんどん東京に移っており、我々は危機感を募らせているところなんです。ぜひ関西の活性化、発展のためにも、九州大学が関西に対する縁をこれまで以上に深めていただくことを願っています。

たいですね。どんな鍛え方がいいかというところ、即戦力であればいいのか、基礎がきちんとしていければいいのか、文化や倫理性を含めた人格形成がいいのかは、時代によって変わりますし難しいところです。ただ最近では、即戦力型の人が企業に採用されやすいという傾向があるように思います。しかし、大学は職業訓練校ではないのですから、即戦力ばかり求めたら、真の意味では大学の存在価値はないと考えます。私には、やはり長い目で見れば、会社や社会のためには、基礎的なものきちんとやっていただきたいという気持ちがあって、その思いからすると、昔の七帝大時代と比べ、今の九州大学の存在感がブロックの中でこじんまりしてきた感じを受けるのです。国家公務員試験にしても、以前は東大、京大の次に、九州大学と東北大学とが争うような時代があったように記憶しています。大学間に企業と同じ競争原理が働いている以上、それくらいの存在感を鮮明に示していただきたいという思いはあります。





対抗軸で考えると、視野や考え方が小さくなる。

変革の途にある九州大学は、
ぜひ独白色を出していただきたい。〔中野〕

上野 「二十一世紀プログラム」

や「全学教育」「大学院重点化」など本当に素晴らしい仕組みが用意されていると思います。一人一人が自主的に考え、対応するような学生が育つでしょう。私の頃は、特に教養部には入学早々放り投げられたような感じでしたから、大変な違いだなと感嘆しています。先ほど九大生がおとなしいという話がありましたが、私の知っている九大出身者を見る限りでは、決

しておとなしくはありません(笑)。

一般的に九大生には九州男児というイメージがあつて、そういう先入観の反動で、目立った動きが無ければ、ちょっと軟弱だなというふうに結びつけられてしまうところがあるのではないのでしょうか。逆に言えば、もっと骨太の活躍をしてほしいという期待が大きいのだろうと思います。それだけ先輩の皆さんが活躍をされてきたということでもあるでしょう。企業は

特定の人材を除いては、大学で習得した知識そのものについては一般的にはさほど関心はありません。それより、これこそ自分の専門だと言えるような知識を必死になつて習得しようとする過程で培われた、進取・挑戦・自助・自立・忍耐・責任という普遍的で基本的な素養に期待しています。このたびの新しい改革の中でさらに逞しい、自信を持った人間が育ち、世界に通用するパワフルなリーダーが輩出され「おとなしい」という評価が自ずと退くことを期待しています。

アジアのリーダーになつていただきたいというのは、本当に悲願ですね。アジアのリーダーとは、世界のリーダーということにつながっていくわけですけれども、アジアといったら九州大学に任せてくださいというくらいの勢いでやっていいと思います。各研究院のプロジェクトはユニークであり、分野を越えた統合的な取り組みが進化し、更には国内外のユニークな特徴を持つ大学間の連携をリードできれば、「九大ブランド」が

確立していくものと期待しています。エネルギー開発事業や環境への取組みについても期待が高まります。更に先進国の中でも日本は非常に災害が多い国。それに対応できるノウハウを持っている訳で、アジアで活かせることも多い。

「安心・安全」と「共生」というキーワードで、災害予知から防災・復興までを「こころ」の領域まで含めて九州大学が担うことができるような取り組みをやつていただきたいですね。大学は、サイエンスという立場で超長期的な視点に立ち、しがらみなく自由に発信ができ、思いきったことが言える、そういうポテンシャルを持った存在です。ぜひ、新しく世の中を変えていくというスタンスで、アジアの大学との連携も含めて、頑張つてほしいと思っております。

中野 銀行の仕事を通じて、国立大学法人化後、東大、京大、阪大、九大と接点を持つてきました。研究のことはあまり知らないままで、今日、非常にパワフルな展開をされていることを聞き、改めて驚きました。九州大学は「九州大学ら



二十一世紀プログラムのような、
教育の九大メソッドを開発していけば、
大学の独自性が濃厚に香り出す。〔藤井〕

しさ」に向かつて変革の途にありますが、ぜひ独自色を出していた
だきたい。私は関西経済同友会の
関係で取材される時、「大阪は東
京と比べてどうですか」という質
問をよく受けます。でも、大阪と
東京とを対抗軸で考える必要はな
いというのが私の考えで、大阪の
独自色を忘れないことこそ重要だ
と思っています。対抗軸で考える
と、視野や考え方が小さくなりま
す。関西とアジアとの関係は非常

に深いものがありますが、同様に
九州大学はエリア的にも一番アジ
アに近いでしょう。九州大学も広
い視野で、東アジアを統べるよう
な、環境やエネルギーなどのプロ
ジェクトをどんどん推進して、日
本の大学の中で九州大学が最も進
んでいるという領域を確立するこ
とが、これから一番大事なことで
と考えます。
海外でも、ハードパワーに対し
て、ソフトパワーということが言

われています。ソフトとは仕組み
のこと。その仕組みこそ目線を広
げる鍵だと私は思っています。私
は証券関係の仕事に十年近く携わ
って、NY、ロンドン、シンガポ
ール、香港など世界の金融都市の
さまざまな銀行、そのトップと交
流しました。その中で自分の目線
が変わっていくのです。国内の目
線でものを捉えていたのが、グロ
ーバルになっていく。そういうこ
とは実際に経験しないと分かりま
せん。学生の間ですからすべては
網羅できませんが、ぜひ学生の目
を開かせる、海外との交流の仕組
みを作っていたいただきたいです。

藤井 私は東京の霞ヶ関で仕事を
する一方、二年間少々ですが、大
阪府庁で働かせていただきました。
お叱りを受けるかもしれませんが
(笑)、正直に言うと、その時に
東京と大阪の違いを非常に強く感
じました。東京は「タテマエ」で、
大阪は「ホンネ」の世界。福岡、
九州はどちらかというと、東京文
化圏ですね。日本の文化というの
は歴史的に見て上方が中心で、そ
こから同心円的に広がっていきま

すから、九州は東京と同じ円周上
に位置します。日本国内でも、ず
いぶん文化や考え方の違いがあり、
その点が大変重要なことだと思っ
ます。ですから、「ホンネ」しか
通用しない土地柄にある関西同窓
会が、東京や福岡とは違った性格
を持って、九州大学の未来につい
て、いろんな形で支援をしていた
だくというのは大変ありがたいこ
とではないかと思っています。

私は九州大学の経営協議会に委
員として参加していますので手前
味噌になるかもしれませんが、九
州大学が二十一世紀プログラムを
はじめ、新しいやり方にチャレン
ジされていて、それは成功してい
るのではないかと思っています。
伊都キャンパスへの移転は、「新
しい革袋」に「新しい酒」を盛る
ような作業でなければいけないと
思います。通常は逆で、「新しい
酒」は「新しい革袋」というこ
となのでしたが、あえて「新し
い革袋」には「新しい酒」をと申
し上げたい。二十一世紀プログラ
ムのような、国際的に通用する広
い視野をもった人材の育成に果敢



変化に伴う苦労はあるだろうが、後になって、自分たちが主役の草創期だったと言える頑張り方をしてほしい。〔荒巻〕

に挑戦していただき、九州大学メソッドといったものを教育の分野でも開発していけば、大学の独自性が濃厚に香り出すのでは、と感じております。

梶山 私が総長になった時、九州大学の将来構想のベクトルの一つとしてアジア指向を掲げました。すると、学内からでさえ「アジアだけか。なぜ世界に挑戦しないのか」と指摘されたのですが、アジアへ挑戦することは、世界に挑戦

することです。これほど激動しているアジアを見なかったら、日本は世界から置いてきぼりを食うでしょう。

九州大学は、アジアにも多くのオフィスを有しています。ソウル大学にも九州大学のオフィスがあり、ここを通じて韓国の首相に会うなど活用しています。シリコンバレーでは毎年三月に一週間かけて「ロバートファン・アントレプレナーシップ・プログラム」を実

施しています。ファン氏は九州大学の元留学生で、コンピュータ関連企業を起こして、アメリカで大成功を収めた人物です。このようにアジアから世界へという仕組みも段々できています。

今こそ新九大草創期

柴田 関西同窓会の開設で、今回のように諸先輩方のご意見を伺える機会ができました。最後になりますが、ぜひ関西らしい本音で、後輩に対する激励をいただきたいと思っています。

荒巻 私は制度の変わり目にはかり生きてきた人間です。旧制大学から新制大学になった時もそうですが、さかのぼると、尋常小学校から国民学校の変わり目にも立ち合わされました（笑）。それだけに今回、国立大学法人となり、しかも新しいキャンパスに移る今の九大生諸君に、何か親近感を感じています。私が九州大学を卒業する年は、旧制大学三年生と新制大学四年生が同時に社会に出るものですから、就職の倍率は単純計算

でも二倍。さらに一年長く勉強している旧制から採用されていくものですから、新制の私たちには、受験のチャンスさえないという厳しい状況でした。皆さんも変化に伴う苦労はあるでしょうけれど、新しい施設や教育への配慮などプラスの要素がはるかに多いのですから、後になって、自分たちが主役の草創期だったなと思いたいような頑張り方をしてほしいと願っています。

上野 今回の改革は学生にとって、は素晴らしい内容で、自分たちがいた頃に比べると本当に勉強しやすい環境になっていると思います。気合いを入れて、今この時を有意義に過ごしていただきたい。私の学生時代は「カネもち」ではなかったが、可処分（かしよぶん）という意味では「トキもち」ではあったはずですが、今思えば「あの時やっていたらいい」ということばかりです。「志」を実現するかどうかは自分しか責任を負えないのが人生。時間はさかのぼれないのだから、今いる時間、環境の中で自分なりに目標と実行マイルストー



ンを設定し、できれば「有言実行」し、精一杯、それこそ死ぬ気でやったというくらい打ち込んでいた方がいいですね。問いを学ぶと書いて学問です。know howではなく、know whyという根本的な問いかけから、本当の学問をやってほしいと、自らの反省を踏まえて皆さんに強く訴えたいと思います。

中野 我々も学生時代は「今の若自分しか責任を負えないのが人生。時間はさかのぼれないのだから、今いる時間、環境の中で精一杯、それこそ死ぬ気でやっていただきたい。」
〔上野〕

者」って言われたものですが、皆さんの中にも受験勉強して大学に合格して、何となく達成感を感じている人が少なくないかもしれません。だからこそ、大学とは何かということをもう一度考えてほしいのです。鍵は、好奇心をどうやって呼び起こすかということ。現在、会社では若手が面白いと思うことをどんどん展開できる状況になっています。仕事は与えられる

ものという感覚を捨て、自分から取っていくことが大事です。学生生活も自分で何かを取りに行く。そのためにもう一度「大学とは何か」を考え、四〇六年間を過ごしてほしいものです。

藤井 私の学生時代は、大学紛争華かなりし頃で、様々な立場の人が様々な意見を言い、ノンポリだった私でも何らかの問題意識に目

覚めざるを得ない環境でした。自分とは一体何ができるのか、何をやらなければならぬのか、社会と自分との関係とは、など考えざるを得なかったのです。就職した後、それは大いに役に立ったのではないかと思います。したがって、後輩の学生の方々にも次のようなアドバイスをしたい。「社会がどういう成り立ちで、どういう方向に動こうとしているのか」にもう少し関心を持って、その中で自分の存在、社会と自分との関係を考えて下さい。結論は出なくてもいい。考えれば、そこから何か出てくる。ますます疑問が出てくるかもしれないませんが、考えるということ、疑問を持つことに七転八倒し

てもいいのでは。私が司法試験に落ちたと話すと、学生は嬉しがるのですが、第一志望がダメでもいいのです。若い頃に挫折するのはむしろいいこと。小さくまとまるほうがずっと残念です。挫折を恐れなくていろいろなことにチャレンジしてください。

梶山 後輩への貴重なエールをありがとうございます。皆様の九州大学への思いをひしひしと感じました。それを私たちが特に教育にどう活かすかということです。研究は最近、なかなか個人では難しいレベルになって、グループ化が進んでいます。教育は最終的には人と人の接点。情熱を語っていれば、学生は自分で吸収します。学生を引きつける最善の道は、情熱という吸引力を持った先生をそろえることで、そういう先生をいかに増やすかが私の仕事だと考えております。皆様には、今後ぜひご支援をいただきたいと思

います。

柴田 本日は本当にありがとうございました。

（この座談会は、平成二十年六月二十五日（水）、メルパルク大阪で行われました。）